

2020年度一般入学試験(学科別) 記述式問題 解答

科目:2月4日 哲学科・学科試験

【1】

問1 テキストの基本的な内容理解を確かめる、またそれを自身の言葉でパラフレーズすることを求める問題である。

第一、第二段落で筆者はさまざまな用語法をもちいて、精神分析が精神の全体的な統一を分解・還元することで説明し、またそこでの個々の説明要素を人格的機能を有するものであるかのように語ってゆくさまを描いている。またそこでは、人格的統一において説明されるべきものが、その解体において説明されることの、奇妙さや本末転倒なあり方が修辭的の用語法をもちいて描かれている。

(解答例) 精神分析の方法的誤りは、その統一において認められるべき人間精神の固有なあり方を軽視し、それを個々の要素から組み立てられたものと説明しようとするところにある。そこでは、その個々の要素は、統一のなかではじめて個々に役割や機能をもつようになるはずであるが、諸要素が個々の機能をもって精神的統一を成しているかのような本末転倒した構造を呈する。

問2 テキストの断片から、筆者の全体的視点・論点を推測し、筆者の議論と自身の問題関心の接点をみだしてゆく読解力と思考力を要求する問題である。

引用されたテキスト全体では、人間精神が解体的に理解されることを批判し、人間精神をその統一および自律性を損なうことなく取り扱う必要が示され、それが収容所を生き抜くこととどのように結びつくのか、回答者が自身で思量し、論じることが求められる。また一般的な社会常識としての歴史的事実の理解も求められる。

(解答例) 一定程度、健康で文化的な生活を日常と考えることのできる社会状況においては、(言葉やものごと、そして生きること)の意味は向こうから与えられてくる。意味が一つのまとまりをもって成立していることが当然の状況がある。そのような状況でなら、意味を考え、また感じる当のものとしての、自我や精神を分解してみて、その要素から説明しなおすということも意味があろう。しかしたとえば強制収容所などのように、生きることの意味を見いだすのがきわめて困難な状況にあつては、自ら思惟し、感じ、そこに意味を絞りだしてくるほかない自我や精神を、それを構成している諸要素であっても、それ自身ではないものから説明し、意味づけようとするのは、たしかにまったくの虚ろでナンセンスなものになるだろう。自らもがきながら、自らに意味をあたえてゆくこと、それが彼のいう「精神的実存の自律作用」なのではないだろうか。

【2】

選んだテーマの記号()

哲学の歴史において長く重層的な土壌を有する(問い)を理解し、その問いが問うている中心的なポイントへ向けて、当上智大学文学部哲学科で勉学することを志望する志願者の受験生たちがどのように(現段階で)応答するかを設問の狙いとする。選択した問いそれぞれが有する問題脈絡を一定の的確な理解を通して捉えることができるか、また問いの有する問題地平の射程と興行きにどこまで迫ることのできる論述を為すことができるかが、評価の基準となる。

a. 「凡そ人は如何に生きるべきか」というソクラテスの問いにはどのような特徴があるのだろうか?」については、日常的な「何をしようか」という問いを超えていながら、差し迫って応答するような要請を有さず、多様な観点からの熟慮を含む問いであるが、倫理的-道徳的考慮はこの問いの下に為される必然的な一つの考慮であることがポイント。

b. 「美と真理は一致するのだろうか?」については、西洋の古代哲学以来、哲学の真理要求と芸術の模倣(ミメシス)の間の軋轢から近代美学の成立を通してどのような問題を生み、またこの対立が20世紀の「芸術の真理」への新たな思索によって超克されるようになったが哲学史的背景。

c. 「哲学と心理学はどのように異なった学問であるのか?」という問題は、高校生の関心から質問を受ける問いでもあるが、基本的に心理学は人間の心の在り方を学問対象とするが、経験上のデータを基礎として一定の方法に基づく科学(精神科学)であるのに対して、哲学は人間の心や精神を考察の課題とする場合にも、心や精神といった主題がどのように問われ考究の課題となり得るのかを先ず長い道程をもつての究明を必要とするという相違を指摘することが重要である。

d. 「倫理は理性の法則のようなものなのか?」という問いかけは、イマヌエル・カントに代表される(実践)理性の事実からの道徳法則を普遍的倫理が成り立つ根拠とする立場に対して、このような倫理の普遍主義的-自由主義的理解に対して異なった倫理のコンセプト(共同体主義や実存主義からの倫理の構想)を問題化する。

e. 「哲学に定まった(方法)は存在するのか?」という問いは、哲学に特有な学問性が存するとしたならば、その学問性とは近代西欧の経験科学の(学)理解を規範とする方法の問題とは凡そ異なった圏域で考えられねばならない(哲学は決して科学性や学問一般を尺度とするものではない)ことがポイントである。

以上、中心ポイントは挙示できるが、どの設問についても、いわゆる(模範解答例)といったようなものは存し得ない(この事態そのものが、哲学的問いの本質を成す)。